

---

# 挨拶

のなみこころ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

挨拶

### 【Nコード】

N4811B

### 【作者名】

のなみこころ

### 【あらすじ】

彼方は、羽田空港に降り立った。彼女に会うために。

彼女の笑顔。

挨拶でもするような  
軽い口調。

俺は、一生、  
忘れることは  
できないだろう。

『今日は、○○航空をご利用いただき、誠にありがとうございます。  
またのご利用お待ちしております。では、お気をつけて、いつてら  
っしゃいませ』

アナウンスが終了した。

機内は、今か今かと、空港内に入りたくてうずうずしている乗客が、  
通路を塞いでいた。

彼方も、その中の1人だった。

窓の外に目をやる。

羽田の天気は、晴れ。

千歳は、コートは必須だったが、どうやら、こちらでは出番はないらしい。

飛行機と空港を繋ぐ通路からは、ひんやりとした空気が流れていたが、やはり、コートの必要はなさそうだと、彼方は悟った。

歩きながら、携帯電話の電源を入れる。

そして、彼方は、電話をかけた。

「うん、今着いたよ。…うん、…じゃあ、後でね」

彼方は、電話を切ると、小さく、溜め息をついた。

羽田からは、赤い電車に乗り込む。

そして、品川で、下車。

改札を抜けると、大きな柱の所に、立っている彼女を見つけた。

数ヶ月ぶりに会う彼女は、髪型を変えていた。

前に会った時は、腰まであるストレートの髪だったが、今は、ボブで、襟足に、軽くパーマをかけている。

「恵美」

彼方の声に、彼女は気づき、照れくさそうに、小さく手を振った。

「おかえりなさい」

「ただいま」

彼方は、元々、北海道の生まれだ。

東京の大学へ進学し、その時に、恵美と知り合った。

そして、2年前から、彼方は実家に戻り、地元の市役所に勤めている。

その間、休みを利用して、恵美に会いに来る。

今回は、東京に1泊する予定だ。

「クスクスクス」

山手線で、新宿へ向かっている時、ふいに、恵美が笑いを洩らした。

「どうした？」

「ほら、あの日のこと、覚えてる？」

笑い声は止んだものの、目はまだ笑っている。

「あの日？」

「高島屋のところの動く歩道で、彼方、こけそうになってたよね」

窓の外からは、高島屋のビルが見える。

もうすぐ、新宿駅だ。

彼方は、思い出し、照れくさそうに、笑った。

「あつたなし、そんなこと。でさ、隣を歩いてたヤツに、ぶつかりそうになってさ」

恵美が、ぷくつと吹き出す。

「そうそう。おじさん、すごい睨んでたよね」

「でも、あん時、恵美、ひどいよな。後ろで、ただ笑ってるんだもんなあ」

「だって」

二人は、電車から下りても、しばらく、笑っていた。

二人の話すこと。

近況はあまりない。

あるのは、想い出話ばかりだ。

問題の高島屋の動く歩道では、今回は、何事もなく、通過したが、恵美は、笑っていた。

「…あー、おかしい……」

東口周辺を歩いている時にも、昔の話で盛り上がり、ひとしきり、二人は、笑った。

しかし、笑いの後には、会話が続かなかった。

「あ、こんな店、出来たんだ」

通りに、見たことのない洋服屋を見つけた彼方。

「うん、先週ね」

最後に、彼方が新宿へ来たのは、1年近く前。  
その間に、街は刻々と変化を遂げていた。

「ねえ。あのお店、久しぶりに行ってみない？」  
高いトーンで伝える恵美。

「あの店？」

「ほら、二人で、よく行ったでしょ」

「あー、あのラーメン屋か！」

「そうっ」

二人は、学生時代、中野区に住んでいて、その頃、近所に、行き着  
けの店があった。

学生に人気のとんこつラーメン屋。

店は汚いし、親父も愛想は全くなかったが、貧乏人には、量やサイドメニューを時折サービスしてくれるし、何よりも、おいしかった。

黄色いラインの電車に乗り込んで、中野駅で下車。

駅から徒歩20分ほどのところに、店はある。

…はずだった。

二人は、店の前に立ち、声を失った。

店のドアは、固く閉ざされ、“閉店しました”という手書きの紙が、はためいていた。

「おじさん、もうトシだったもんね」  
恵美が、しょんぼりとして言った。

「ああ」

彼方も、しょんぼりとして言った。

「おじさんにも、会いたかったね」

「うん」

二人は、仕方なく、近くのレストランに入った。



その店は、高額メニューばかりで、学生の時分には、決して、敷居を跨げなかった。

いつも、「いつか、二人で入れるようになりたいね」と話していた、憧れの店だった。

その頃のことを思い出しながら、「ここに入れるように、オレらもなったんだ」などと、話した。

そして、店を出た後、「でも、私たちには、あのラーメン屋のが、好みだったかもね」と、恵美が茶目っ気たっぷり冗談を言って、二人で笑い合った。

夜。

彼方は、恵美の部屋に泊まった。

学生時代は、ぬいぐるみが枕元に置いてあるようなフアンシーな部屋だったが、社会人になってからは、シックな部屋になっていた。

彼方と恵美は、裸のまま、抱き合って眠った。

翌日。

彼方は、昼の飛行機で帰る。

あまり時間はない。

二人は、空港で、朝食をすませた。

『〇〇航空、△便、千歳行きご予約のお客様、搭乗手続き終了のお時間が迫っております』

彼方の乗る飛行機の出発が刻々と迫っていた。

彼方と恵美は、空港のロビーにたたずんでいた。

「そろそろ、行くね」

彼方が立ち上がる。

「うん」

恵美も、立ち上がった。

搭乗口へ向かう二人。

恵美は、途中で止まった。

彼方も、立ち止まる。

「また」

彼方は、曖昧な笑みを浮かべ言った。

恵美は、首を横に振った。

「もう、帰ってこなくていいよ」

恵美は、軽い口調で、彼方に告げた。

彼方は、呆氣にとられる。

「…どうして？」

恵美は、笑っている。

「他に、好きなコ、いるんでしょう？」

彼方は、愕然とした。

「本当は、サヨナラをしにきたんでしょ？」

恵美は、笑っている。

彼方のほうが、泣きそうな顔をしている。

「付き合い長いんだよ。それくらい、分かるよ」

恵美は、彼方の背中を押した。

「バイバイ」

恵美が、決定的な一言を言った。

二人の遠距離恋愛が始まった時、約束した挨拶があった。

再会した時の挨拶は、「おかえり」「ただいま」。

彼方が戻る時の挨拶は、「いつてらっしゃい」「いつてきます」。

別れることになった時の挨拶は、「バイバイ」「バイバイ」にしよう、と。

「…バイ、バイ」

彼方は、恵美のほうを見ることができず、振り絞るように、呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4811b/>

---

挨拶

2010年12月5日11時38分発行